地域調査報告　21　77-87　1999

福岡県矢部村と星野村における山村地域振興

横山　智

キーワード：地域振興，山村，都市山村交流

Ⅰ　はじめに

林業が衰退の一途をたどる中，林業が主要産業である山村では生活基盤維持と自治体活性化のため様々な試みがなされている。そのひとつが「むらおこし」事業である。「むらおこし」事業には，近年２つの起爆剤があった。最初は1979年に大分県で始まった「一村一品運動」であった。次に1988年に全国の自治体に支給された１億円の「ふるさと創生資金」である。また，1962年の全国総合開発計画（全総）に始まり，1987年に策定された現行の第四次全国総合開発計画（四全総）に至るまでの総合開発計画や1987年の総合保養地域整備法（通称リゾート法），そして1990年に公示された過疎地域活性化特別措置法などの地域振興に関する法令も「むらおこし」に大きな影響を与えた[1)]。

現在，注目される「むらおこし」は，都市住民との交流を通して地域活性化を行う事業である。この考え方は四全総でも明確にされ，国土庁（1987）は，都市と農山漁村の交流を６つのタイプに分け（第１表），地域に合った活性化を推進した[2)]。四全総以降の都市と山村の交流に関する研究では，都市住民とのふれあい事業を総合的に調査し，町主導の観光開発を行った事例から地域変化の構造を明らかにした篠原（1996）の研究がある[3)]。また，関戸（1994）は縁組み型による都市との交流で地域の活性化を行っている自治体のうちで，その成功は相互交流を求める都市部の要求の強さと高速道などのインフラによる都市との近接性にあると結論づけた[4)]。

上述の研究事例を見ると，都市と山村の交流による地域活性化の特徴は，外部資本に頼らずに，山村側もしくは都市側からの内発的な働きかけによって山村側の地域活性化がなされていることにある。一方，村自体が条例を施行して外部資本の乱開発に対処し，景観保護につとめることで自然資源を観光と結びつけて地域を活性化している事例もいくつか研究されている[5,6)]。このような内発的な振興は，山村という地域の魅力を最大限に引き出し，そして自然資源保護と開発の持続性を保つ要因として重要と思われる。そこで本稿では，都市と山村との交流事業からみた山村の地域振興の方向性を明らかにし，研究対象地域の事例から，今後の方向性を明らかにしてみたい。

研究対象地域は，福岡県矢部村と星野村である。両村は筑肥山地北東の八女林業地域の一角にあたる。福岡県では東南端に位置する自治体で，山林

第１表　都市と農村の交流の分類

タイプ	都市と農村の既存交流事例
レジャー型	ペンション・レジャーランド
教育型	山村留学・臨海学校・林間学校
まつり型	農産物の提供を兼ねた各種イベント
縁組み型	姉妹都市・特別町村民制度
根おろし型	工芸・芸術村
便り型	ふるさと宅急便

（国土庁計画・調製局四全総研究会（1987）：『図説四全総－21世紀への国土づくり』地球社p.101を修正）

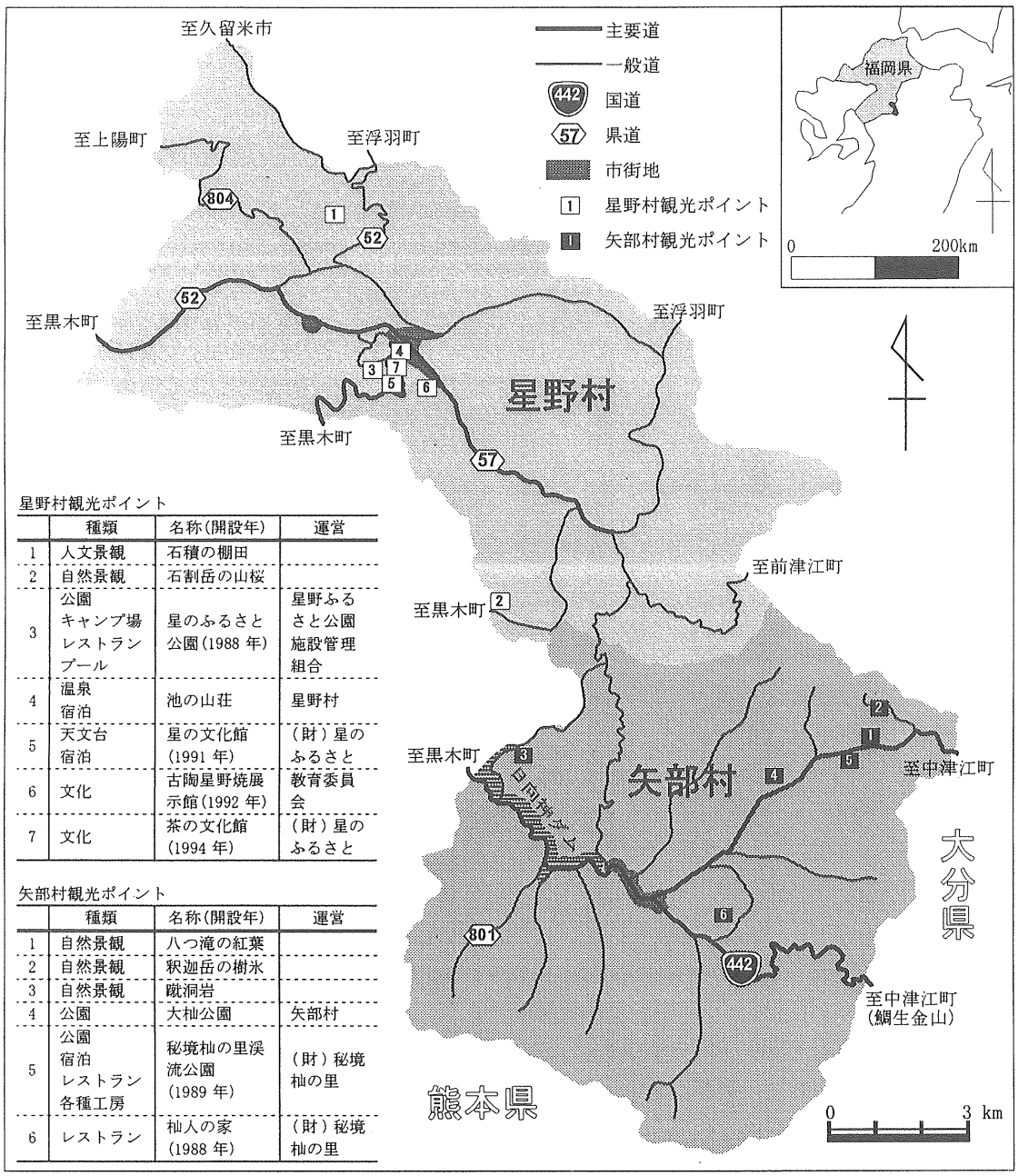
面積が8割以上を占める山村である。また，第1図に示したような観光ポイントを有し，地域振興を目的とした施設の建設にも積極的に取り組んでいる。そして，それら施設を通して村内の活性化を図ろうとしている地域である。

Ⅱ　矢部村と星野村の開発経緯と地域振興事業

Ⅱ－1　開発経緯

1）星野村の開発経緯

星野村は，林業に加えて古くから茶の産地とし



星野村観光ポイント

	種類	名称(開設年)	運営
1	人文景観	石積の棚田	
2	自然景観	石割岳の山桜	
3	公園 キャンプ場 レストラン プール	星のふるさと公園(1988年)	星野ふるさと公園施設管理組合
4	温泉 宿泊	池の山荘	星野村
5	天文台 宿泊	星の文化館(1991年)	(財)星のふるさと
6	文化	古陶星野焼展示館(1992年)	教育委員会
7	文化	茶の文化館(1994年)	(財)星のふるさと

矢部村観光ポイント

	種類	名称(開設年)	運営
1	自然景観	八つ滝の紅葉	
2	自然景観	釈迦岳の樹氷	
3	自然景観	畩洞岩	
4	公園	大杣公園	矢部村
5	公園 宿泊 レストラン 各種工房	秘境杣の里渓流公園(1989年)	(財)秘境杣の里
6	レストラン	杣人の家(1988年)	(財)秘境杣の里

第1図　福岡県星野村および矢部村の観光ポイント
(星野村役場資料，矢部村役場資料，および現地調査により作成)

て高級茶の玉露の生産に力を入れ，高級茶「星野玉露」のブランドを確立した。しかし，地形的制約によって，山間を茶畑に開墾するにも限度があり，栽培面積は220ヘクタールにとどまっている。

星野村の人口は1940年に9,226人のピークをむかえ，その後は減少し続けている。人口のピークは村内に立地していた金山採鉱のピークでもあった。星野村には，星野金山と呼ばれる金山が1200年代の古くから立地しており，江戸時代はかなりの賑わいを見せていたとされる。その星野金山は，1935年前後より企業が採鉱を開始し，1943年の閉山まで相当数の鉱夫が筑豊炭田から移動した。閉山後は，人口流出が激しく，現在（1995年）は4,103人にまで減少した。

過疎化が進み，若年層の流出が目立ち始め高齢化率も30％となった。村として若年者の定住条件の整備と過疎脱却を柱にした地域振興策を打ち出す必要性が高まってきた。そして1988年に地域振興事業の「星のふるさと公園整備事業」を導入し，星野村麻布地区に16.3ha の「星のふるさと公園」を建設した[7]。

この公園だけならどこにでもある普通の総合公園と変わりがない。しかし，星野村の場合，更に1990年より自然・産業・文化・歴史という地域資源を生かすための地域振興事業である「星と文化の里づくり事業」を前述の「星のふるさと公園整備事業」と絡めて実施した。

2）矢部村の開発経緯

矢部村は星野村に比べて林業への依存が高い。茶の生産も盛んであるが，ブランドイメージを形成するまでには至っていない。人口は1950年の6,251人をピークに，現在は1,942人まで減少している。矢部村の場合，過疎化には山間部であるという地理的要因に加えて，星野村と同様，村内に坑口と精錬所が立地していた鯛生金山の閉山，そして日向神ダムによる集落の水没という社会的な要因が大きく関わっていた。

大分県中津江村に事務所が立地していた鯛生金山は，1894年から1972年までの72年間操業を行い，大分県側の鯛生坑口と福岡県側の矢部坑口に２つの坑口を持っていた[8]。村の街道筋には，映画館，旅館，飲食店，バー，遊技場などが軒を連ね山間の村が鉱山町の賑わいを見せていた[9]。それが，1972年の閉山で次々と姿を消し，普通の山村へと戻っていった。

1960年に完成した日向神ダムは，洪水防止，農業用水確保，発電を目的とする多目的ダムである。このダムによって移転を余儀なくされた住民は220世帯1,018人にのぼり，耕地減少と人口の村外流出を招き，更に過疎化が進む結果となった。

鯛生金山閉山と日向神ダム建設による人口減少に加え，村の主要産業である林業の不振により，若者の定着率は低くなり，高齢化と後継者不足の問題解決が課題となった。そこで，1987年に矢部村は国土庁「リフレッシュふるさと推進モデル事業[10]」の指定を受け，「秘境 杣の里渓流公園」を創る計画を打ち出し，都市と山村の交流を柱に地域振興を行うことになった。

Ⅱ－２　地域振興事業の特徴

1）星野村「星と文化の里づくり」事業の特徴

「星と文化の里づくり事業」は，「お茶と文化の里づくり事業」と「星の里づくり事業」の２つのプロジェクトから成っており，前者は「茶の文化館（1994年４月開館）」と「古陶星野焼展示館（1992年４月開館）」の建設，後者は「星の文化館（1991年12月開館）」の建設であった。このプロジェクトは，村の産業の柱である「茶」と星野という村名からイメージされる「星[11]」をテーマとして地域振興を図ることが目的であった。

また星野村では，このプロジェクトに先だって，村民各層で「星野村活性化推進委員会」を組織した。そして「星野村の地域イメージ作りの方法」に関するアンケート調査を村民に対して実施し，そのアンケート結果を「星野村活性化推進委員会」で検討して決められたものが，上記２つのプロジェクトであったことが興味深い[12]。

この事業により，１カ所で「見る・遊ぶ・味わう・泊まる」というリクレーションの全要素を有する総合的な空間を創り出すことに成功した。特

に「見る」施設が充実しており，九州では最大級の反射型望遠鏡を有する「星の文化館」天文台，村内を一望できる位置に立地し本格的なお茶と和菓子が楽しめる「茶の文化館」，そして個性的な回廊式ギャラリーに陶器が展示されている「古陶星野焼展示館」の３つの施設で１日中楽しめるように考えられている。また様々な観光客を考慮し「泊まる」施設にも工夫がなされ，自然派にキャンプ場とバンガロー，団体や熟年者向けに「池の山荘」の温泉宿，そして若者向けにペンション風の「星の文化館」が選べるようになっているのが星野村の事業の特徴であろう。

この事業は，1991年に農協・森林組合・商工会・星野村に加えて，経営コンサルタント・バス会社・銀行の７団体によって設立された「㈶星のふるさと」によって運営されている。

２）矢部村「杣の里渓流公園」事業の特徴

矢部村の「秘境 杣の里渓流公園」は，渓流沿いの森林浴ハイクが楽しめるほかに，渓流釣りやヤマメのつかみ捕りが楽しめる広場，宿泊施設「ソマリアンハウス」，クラフトセンター（陶芸工房・草木染め），レストラン「ル・クレソン」，杣の大吊橋からなる総合リクレーション施設である。そのコンセプトは，来客には四季折々の豊かな自然に触れ親しみ，来客自らが遊びを創り出す空間の提供である。この「秘境 杣の里渓流公園」では特産民芸展示施設以外，展示館のような施設は無い。

また，施設は「秘境 杣の里渓流公園」の１カ所ではなく，1858年に建てられた民家を改造したレストラン「杣人の家」，特産品販売所「旬の厨」が村内に点在している（第１図）。

ここで説明した事業は，星野村の事例と同じく第三セクター「㈶秘境杣の里」という法人組織により運営されている。設立には農協・森林組合・商工会・矢部村のほかに，鉄道会社・銀行（２行）・広告代理店・生協・八女郡町村長会の10団体が加わっている[13]。

また，㈶秘境杣の里では，会員制を採用しており，会員は「特別村民ソマリアン」として待遇され，宿泊費の割引や各種イベント参加費の割引のほか，年４回の会報「ソマリアン」が送付される[14]。会員制にしたことによって，矢部村との親密さが増し，また固定の交流客の確保にも成功している。

Ⅲ　都市との交流事業

Ⅲ－１　グリーン・ツーリズム（星野村）

星野村では，３つのグリーンツーリズム事業を企画実施している。最も古くから行われてきたグリーンツーリズム事業は，「イモほり農園オーナー制度」で1987年から始まった。1998年度は270区画（１区画3,000円で５m×１m）を用意し，約４kgの収穫が得られるように設定している。播種・管理は村側で行うが，収穫はオーナーが行う。オーナーの約９割が県内で，収穫際には家族で訪れるオーナーが多い。オーナーには，農場見学，交流会，収穫祭の年３回の案内を行い，その都度星野村に訪れる機会を創造するように工夫がなされている。

次に「茶摘み体験ツアー」が1995年から開始された。これは，都市住民に山村の良さを理解してもらい，また星野のお茶のPRも兼ねている。一人当たり１m×50cmの区画を用意し，福岡県内の旅行代理店を媒介にしてツアーの募集を行う。摘み取った生葉は製茶せずに持ち帰ることになるが，参加者には生葉を使用したレシピのプリントを配布する。また当日は，お茶の味を当てる「闘茶会」が「茶の文化館」で開かれる。このツアーは人気も高いが，年によって収穫時期が前後してしまい，実施が募集時の日程からずれ込むこともあり，参加者のキャンセルが発生することが問題となる。

最も新しい事業は「グリーンツーリズム in 星野」という事業で，1998年度から開始され，家族・グループ等30組145名のオーナーが参加している。これは，有名な星野村の棚田[15]でそばづくりを参加者に体験してもらう企画である。1区画が50m^2，30,000円で，播種（８月），刈取り（11月初）のほか，収穫祭（11月下）を行う。収穫祭では，参加者がそば挽き，そば打ちを体験できる

企画が用意されている。減反政策の影響と所有者の高齢化によって，労働生産性が低い棚田は休耕田となっているところが多く，この企画は星野村にとっても棚田の有効利用と景観保全に貢献するメリットを持ち合わせている。

Ⅲ－2　イベント型および情報発信型事業

1）ふるさと便（星野村）

婦人グループ「ふるさと会」が1984年から始めた星野村特産品の宅配便が「ふるさと便」である[16]。始めた経緯は，星野村にある特産品が廃れていると感じたグループの代表が，それを何とか換金できるようなシステムは無いかと考え出したものであった。現在では，各自治体や郵便局において，このような企画が一般的となっているが，開始当初は，全国でもまだ珍しい企画であった。会員制度を採用し，会員になると年3回の「ふるさと便」が送られてくる。1998年6月の「ふるさと便」の内容は，ちまき・ラッキョウ・茶・フキの佃煮・味噌・かりんとうのセットで，85名の会員に発送した。内容は毎回異なっている。また，お中元・お歳暮，もしくは1回のみの発送も行う。現在は，最盛期であった1987～88年頃と比べると，会員数は半分以下にまで減少し，経費的に厳しい状況となっており，年2回の発送で，1回の発送の内容を充実するなどの制度見直しを検討中である。

2）山村留学（星野村）

都市部の小学3年生以上の児童が1年間，ホームステイしながら，受け入れ校である仁田原小学校に通学し，星野村での山村生活を体験する企画である。これは1990年に「星野自然の家」という名で開始され，1992年から里親制度の山村留学になり継続している事業である。1998年度は，福岡市近郊から2名，北九州市から2名の都市部の児童を迎えている。

3）アンテナショップ（矢部村）

矢部村の「㈶秘境杣の里」は，福岡市中央区天神に矢部村のアンテナショップとなる「YAS（Yabe Antenna Shop）ソマリアン」を1992年にオープンさせた。ここは矢部村の情報を都市部へ発信する，もしくは都市部の情報を受信する基地として位置づけられている。

「YASソマリアン」は，ありがちな物産品の販売を全く行っていない。店内では，「ソマリアンハウス」内のレストラン「ル・クレソン」で提供しているカレーをメインに矢部村から毎日運ばれてくる天然水で煎れるお茶やコーヒー，そして野菜サラダなどを味わうことができる。喫茶店のような雰囲気で村のアンテナショップという感じはしない。1996年6月からは，夜間営業も開始し，酒類の提供や貸切パーティーへも対応している。ここで行われる独自のイベントは，ミニコンサート，女性のためのセンスアップセミナー，樹氷ツアー，紅葉狩りツアー，花見・お茶摘みツアーなど多種多様で，矢部村と福岡市を結ぶ重要な役目を果たしていることがその企画からわかる。

4）世界子ども愛樹祭コンクール（矢部村）

世界の小中学生を対象とし，森や樹木を題材にした絵画と詩・作文のコンクールを1991年から矢部村で開催している。主催は矢部村，矢部村教育委員会，㈶秘境杣の里，㈶森とむらの会，そして19の官公庁・企業から後援を取り付けて運営にあたっている。1997年度に行われた第6回コンクールでは，2,336点の絵画と777点の詩・作文の応募があり，海外からの応募も現在まで累計7カ国になった。この事業は矢部村の森と樹木に対する姿勢を各方面に伝えるのにも大きな役割を果たしている。

しかし，第6回作品の出展内訳を見ると，半数以上が福岡県内で，しかも学校単位でまとめて出典することによって出展数が保たれている感は否めない[17]。コンクール名は「世界」と唱っているが，ローカル色が完全に消えてはいないことも事実であり，今後は個人レベルでより広い範囲から応募が集まるようなコンクールにする課題が残されていると言えよう。

5）おおそま自然塾（矢部村）

矢部村では，児童・生徒を対象にに森を体験的に学習する学校「おおそま自然塾」を1993年から年3回開講している。これは，学校の「週5日制

に伴う学校外活動促進事業」と位置づけられ，主テーマは「矢部村の自然を学ぼう」となっている。１年に３回，主に矢部村内の児童・生徒が参加することになっているが，毎年８月初旬の夏休み時期に開かれる第２回の「おおそま自然塾」には，村外の「柳川水の会」，「福岡母子福祉会」からも参加があり，森での自然体験のほかに交流会が開かれている[18)]。

６）森の体験学校（矢部村）

「㈶秘境杣の里」では教育型の交流事業として森の体験学校を企画している。７月下旬と８月下旬に「夏休み森の体験学校」を２回，そして12月下旬には「冬の森の体験学校」も開催し，いずれも２泊３日で「ソマリアンハウス」で宿泊もしくはキャンプをする。募集人員は１回25～30名でその費用は会員と一般では異なり，会員の方が安くなっている。今までの内容を見ると，夏は登山，川遊び，クワガタ採集，キャンプファイヤー，ホームステイ，クラフト教室，そして冬は冬山登山，餅つき，雪合戦などが企画され，どの企画も都会の児童が楽しめるようになっている。なお「冬の森の体験学校」は1994年で休止の状態となっている。

Ⅳ　地域振興施設の性格

Ⅳ－１　「星の文化館」の性格

星野村の施設の立地は第１図に示すように「星のふるさと公園」に集中している。「古陶星野焼展示館」以外の公園内に立地する施設へは徒歩での移動も可能である。従って，ほとんどの来客は，「茶の文化館」と「星の文化館」の両方を見学する。両方の施設を訪れることによって，星野村の魅力が増すことは間違いないであろう。

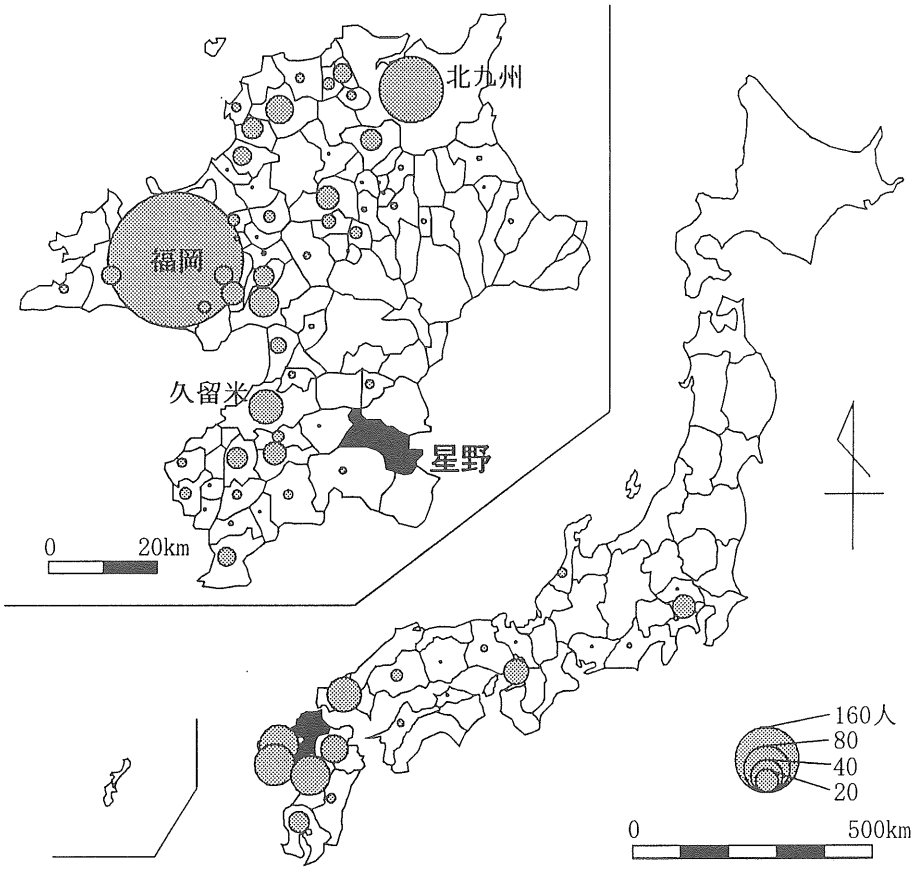
公園内のメイン施設である「星の文化館」の1997年度宿泊客の集客圏は福岡県内とその隣接県に加えて大阪府や東京都からも多く来客がある（第２図）。これは，九州最大級の天文台とペンション風の宿泊施設，加えて地元の素材を利用した料理で持てなすレストラン「北十字星」などが一つの施設内にあることが要因になっていると思われる。

しかし，「星の文化館」においても，来客数が激減する季節が存在する（第３図）。天文台を一番の売りにしている「星の文化館」では，梅雨の季節は星の見えない日が多くなるため来客数が減ってしまう。また，冬季は，天体観測には向いている季節ではあるが，天文台という性格上，ドームを開かなければならず，寒さのために来客数は減少してしまう。以上のデータから示されるように，星野村のメインの施設である「星の文化館」は，広範囲の集客能力を有するが，天候によって星が見えなかった場合は，その魅力が大きく損なわれてしまうという相反する部分も有する施設でもあることがわかる。

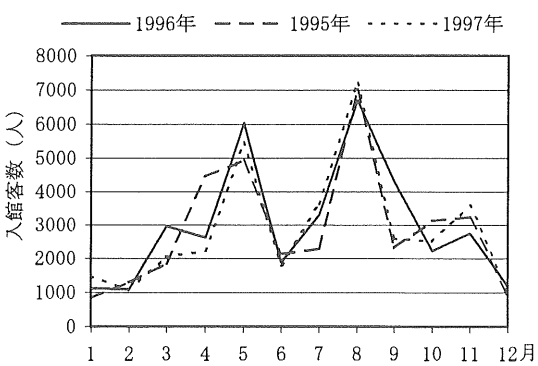
Ⅳ－２　「ソマリアンハウス」の性格

次に，対する矢部村のメイン施設である「ソマリアンハウス」を検討してみたい。「ソマリアンハウス」の場合，宿泊客の集客圏は九州北部および山口県が群を抜いている（第４図）。福岡県内では，福岡市や北九州市などの大都市以外にも，久留米市や八女市，柳川市など，マイカーで１～２時間の範囲からの来客者が多いことが特徴である。

柳川市の宿泊客が多いのは，「柳川水の会」との付き合いからである。水郷の町として知られる柳川市の水源は矢部村源流の矢部川によって維持されているのである。この「柳川水の会」との付き合いは，川上の町である矢部村との第１表で述べた「縁組み型」の付き合いである。前章で述べた「おおそま自然塾」への参加以外でも，矢部村の自然を堪能するために，知人などから情報を得た柳川市民が訪れる機会は多い。また，「ソマリアンハウス」は豊かな自然に囲まれ，そして大人数の宿泊も可能であることから，学校のクラブや学級単位で研修などに利用され場合も多い。福岡県内での知名度の高さは福岡市内に立地するアンテナショップ「YAS ソマリアン」が大きな役目を果たしていると考えられる。



第２図　福岡県星野村「星の文化館」の集客圏（1997）
（財団法人「星のふるさと」資料により作成）



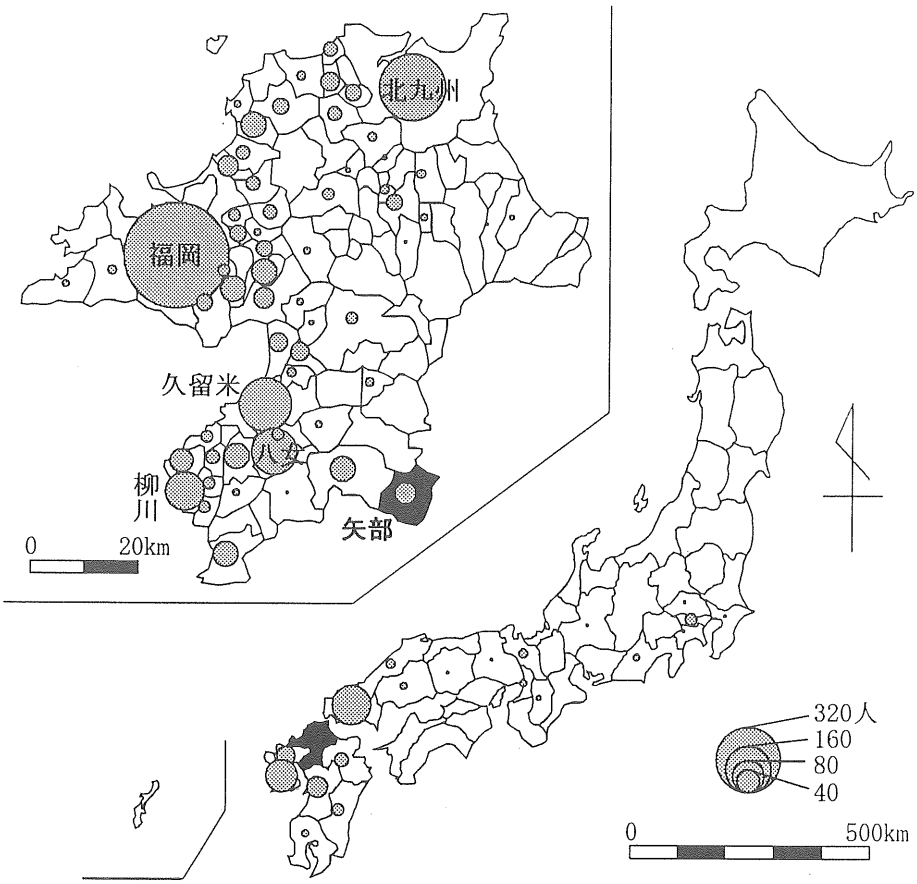
第３図　星野村「星の文化館」入館客数の推移
（財団法人「星のふるさと」資料により作成）

Ⅴ　山村における地域振興事業

Ⅴ－１　地域振興事業の方向性

以上，これまで地理的に隣り合った２つの山村，星野村と矢部村の地域振興事業を述べてきた。これは，第５図のようにまとめることができる。山村において地域振興の材料となる地域的背景には「歴史・文化」，「産業」，「自然」があると考えれられる［第５図（a)］。加えて「過疎化」という現状も考慮する必要がある。そして，それら背景を熟考して，特徴ある地域振興事業を企画しなければならない。

その結果，地域の歴史・文化を生かして，歴史・文化の形成の紹介を行うことを企画し，その展示施設が建設される。また，地域で育っている産業



第４図　福岡県矢部村「ソマリアンハウス」の集客圏（1997）
（財団法人「秘境杣の里」資料により作成）

の振興を考慮し，その紹介施設が造られる。ここでは，どこにでも見られるような特産品販売所の類は振興策には含めない。そして豊かな自然を都市住民に提供し山村を訪れてもらうために，自然と触れ合うことが出来る施設も必要となる。

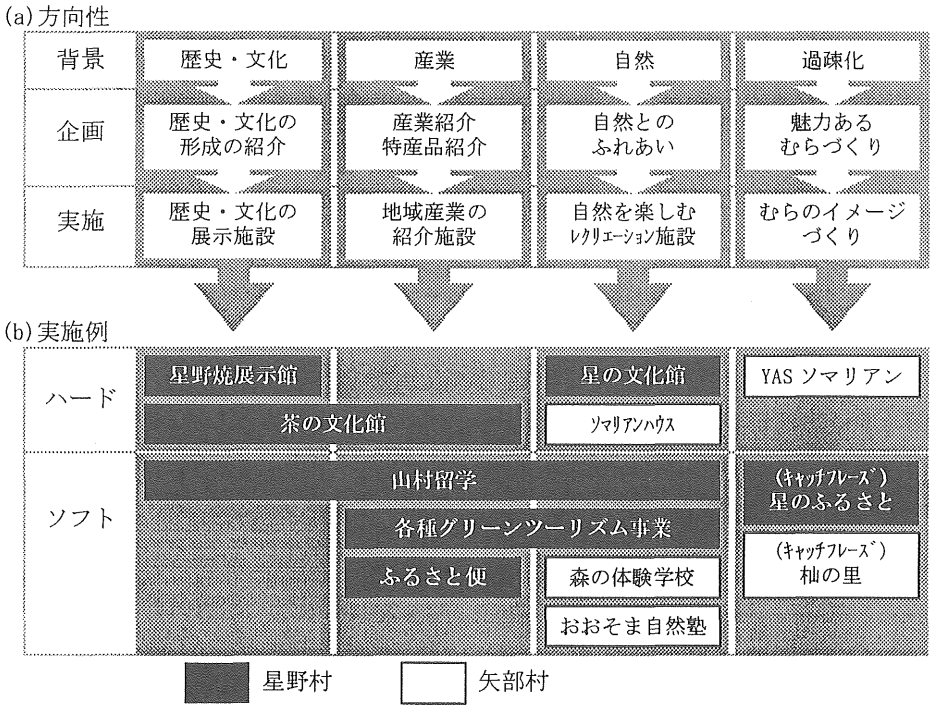
これまで説明した振興策がハード面での企画だとすると，次に考えられるのがソフト面での企画である。山村が持つ「暗い」・「過疎」というマイナス・イメージを払拭し，「豊かな自然」・「人の温かさ」などのプラス・イメージを都市部へ与える必要がある。そのファーストステップが山村のイメージづくりである。

このように，地域振興のために建設される施設を見ることによって，山村の歴史的・文化的背景，自然基盤，そして現在の状況がある程度把握することができる。ここでは，研究対象地域の事例を元に山村における地域振興の一般的な方向性について言及した。これは，現在の日本のどの山村においても当てはまる振興策の方向性であろう。

Ｖ－２　両山村の地域振興事業の特徴

第５図（b）には，前述した地域振興事業の方向性に沿って研究対象地域における地域振興事業の実例を示した。

星野村の場合，施設や企画から，歴史・文化，産業，そして自然の面から均等かつ幅広く地域振興を行う方向性が見られ，１つの施設や企画が２つ以上の目的を持って設置・企画されている。また，村のイメージアップのために，星野村は「星のふるさと」というキャッチフレーズを前面に押し出



第５図　山村における地域振興の方向性と研究対象地域の実施例

して企画を展開している。

一方，矢部村の施設や企画は，自然に重点が置かれ，１つの施設や企画には，はっきりとした目的があることが理解できよう。また，矢部村は「杣の里」というキャッチフレーズを使用し，施設にも「杣人」をもじって「ソマリアン」という名前を用いている。矢部村の場合，「杣」という言葉からわかるように，林業・森林という自然資源をアピールすることに特化していると考えられよう。

自然環境や産業構造が似ている，隣り合った山村でこのような違いが生じたことは非常に興味深い。この違いは，何を全面にアピールするかという考え方の違いもあるだろうが，基本的には，星野村には茶という産業を前面に押し出すことができたという背景があったと思われる。茶の振興とそれに関連した文化を押し出せる強みが星野村には存在していたが，矢部村には星野村の茶ほど，特化した産業がなかったことが違いの要因ではなかろうか。しかし，地域振興の面から現状を捉えると，矢部村の自然に特化した施策は星野村の茶と同様にインパクトが強い。特に，福岡県内においては，矢部村のイメージは非常に高い。これは，村の素晴らしさをアピールするアンテナショップの効果が大きく，財団の設立に都市部の企業を参画させて，経営などのアドバイスを受けていることも成功の一要因と捉えて良いだろう。

また，両村共に都市住民との交流によって，その企画と施設が存続しうるという点が共通の特徴と言えるだろう。

Ⅵ　おわりに

本稿では，都市と山村の交流を地域振興の柱としている福岡県星野村と矢部村を研究対象地域として，それぞれの地域振興の特徴を明らかにした。その結果，以下のことが明らかになった。

山村における地域振興の方向性は，村の歴史・産業・自然などの背景をもとに企画をつくり，それをアピールする方向へと展開される。また，過疎化という現状に対しては，まず村内において魅力あるむらづくりに取り組み，結果として対外的

にもイメージアップへとつながる方向に振興策が展開されている。

星野村の場合は地域振興の施策が,歴史・文化,産業,自然に置かれ,1つの施設や企画は多くの目的をもったものが多い。また,矢部村の場合は,自然と過疎化対策に特化した施設と企画が多い。

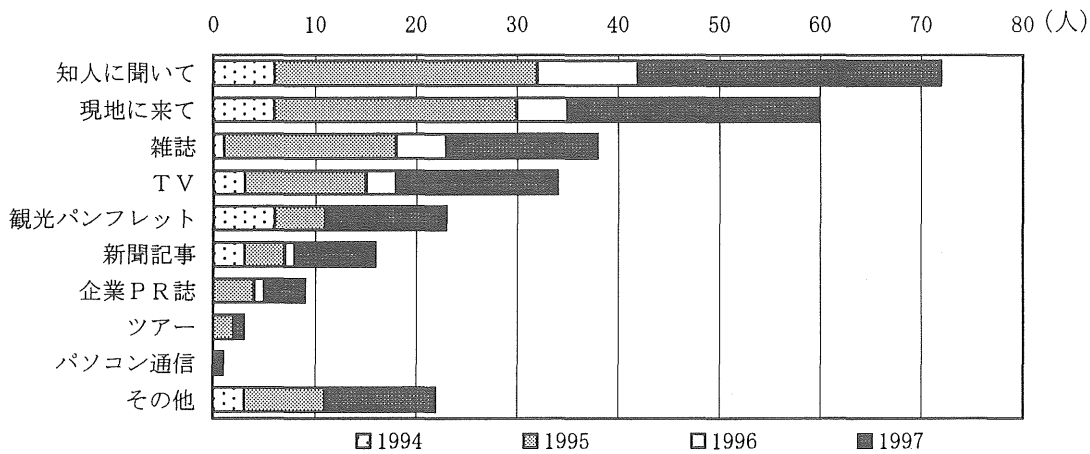
ここで,これまでの検討から研究対象地域における今後の山村振興の方向性を明らかにしてみたい。星野村の場合,3カ所の施設に今後どれだけのリピーターが訪れるかが振興の鍵となるであろう。そのうち「星野焼展示館」と「茶の文化館」の2施設が常設を中心とした施設で,博物館のように企画が定期的に変わる性質のものでないのため,リピーターを引き寄せる企画の立案が必要になると考えられる。また,「茶の文化館」入館アンケートより来館の動機を分析してみると(第6図),「現地に来て」という理由で来館した客が22%を占めている。実際のアンケートには,「たまたま通りすがって」などという回答や,「祖母が住んでいるから」などという回答も多い。星野村の諸施設や企画を目的として訪れた客は,過半数に満たない44%であった。

以上のことから,星野村においては,PR方法の開拓と改善,そしてリピーターを増加させるために,1回の訪問だけで飽きさせないような展示館づくりの努力が必要となるであろう。そのためには,絶えず変化する来客のニーズを把握すること,すなわち情報収集方法の検討が課題となる。また,来客数を増加させるための情報発信も今まで以上の努力が必要になるであろう。

一方,矢部村の場合,財団がスタートして9年目を迎え,その基礎は順調に築かれてきた。ただし,今後どのようにして,都市との交流事業を林業や農業などに絡めて地域の産業振興を行うのか具体的に明らかになっていない。産業振興の面では,星野村が花木団地を造成し,着実に成果を上げており,矢部村でも現存の資源を生かして振興するのか,また新しい産業を導入するのか,いずれにしろ新たな展開が必要である。杣の里でイメージが上がっているが,まだ村民の生活条件向上には直接的に結びつくまでに至ってないのが現状である。

そのような中,矢部村ではU・Iターン交付金支給を実施し,また農林業後継者育成を目的とした第三セクター企業体の設立準備を行っているので,今後その成果を期待したい。

最後に,地域振興を述べるにあたっては,農林業振興や新産業の導入と推進なども考慮した考察が必要であるが,本稿では紙面の都合上割愛した。これらを含めた総合的な地域振興に関する知見は今後の課題としたい。



第6図　星野村「茶の文化館」入館アンケートからみた来館動機
(財団法人「星のふるさと」資料により作成)

現地調査に際しては，星野村企画振興課，矢部村企画財政課，星野村教育委員会，矢部村教育委員会，矢部村森林組合，㈶秘境杣の里，㈶星のふるさと，「ふるさと会」西田陽子代表のご厚意とご協力を賜りました。また，本稿を作成するにあたり，地球科学系　斎藤　功教授をはじめとする諸先生方にご指導を賜りました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

[注および参考文献]

1）半場則行（1995）：日本における地域振興の展開．地理，**40**(1)，112-117.
2）国土庁計画・調整局四全総研究会編（1987）：『図説　四全総 ― 21世紀への国土づくり ―』地球社，193p.
3）篠原重則（1996）：愛媛県久万町の観光開発と山村振興．香川大学教育学部研究報告（第１部），**96**，23-58.
4）関戸明子（1994）：都市との交流事業による地域活性化 ― 群馬県川場村中野の事例 ―．群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編，**43**，173-188.
5）神谷秀彦（1993）：高冷地山村長野県開田村の観光地化．人文地理，**45**，68-82.
6）溝尾良隆（1996）：群馬県新治村におけるリゾート開発計画とリゾート地域の形成過程．経済地理学年報，**42**，18-32.
7）建設省所管の特定地区公園（カントリーパーク）事業で，1988～1993年の５年間で行われた．
星野村企画振興課（1998）：『星のふるさと星野村　視察資料』星野村，20p.
8）中津江村誌編集委員会（1993）：『中津江村誌』中津江村，869p.
9）ひらけゆくふるさと矢部編さん委員会（1992）：『矢部村誌　ひらけゆくふるさと矢部』矢部村，320p.
10）国土庁「リフレッシュふるさと推進モデル事業」は，新たな視点からの“ふるさとづくり”を推進する事業で，具体的にはリクレーション施設建設のための補助金である．矢部村では，施設建設用地の買収から始め1987年に事業の指定を受けた．
11）「星野」という村名のみならず，1988年１月の環境庁主催「スターウォッチング星空の町コンテスト」で環境庁大気保全局長賞を受賞している．
12）星野村の一連の事業は，自治省主催の平成９年度「潤いと活力のあるまちづくり」優良地方公共団体自治大臣表彰を受賞した．
星野村（1998）：『潤いと活力のあるまちづくり部門　自治大臣表彰受賞記念誌』星野村，20p.
13）徳野貞雄（1996）：地域活性化と都市農村交流事業 ― 矢部村『杣の里』事業の実践から ―．地域開発，**96**(4)，7-13.
14）会員は個人会員と法人会員に分かれており，個人会員は１口２年間２万円で４人まで適用され，法人会員は１口２年間15万円で30人まで適用される．1998年度時点で，個人会員84名，法人会員20社の会員数である．
15）星野村上原地区の棚田は，農林水産省主催の「美しい日本のむら景観コンテスト」において，1994年度生産部門で最高賞の農林水産大臣賞を受賞した．
16）星野村は，婦人グループの活動が盛んである．「ふるさと会」以外にも，「竹の子会」，「土筆会」，「あじさい会」，「わらび会」，「たんぽぽ」，「菜の花」，「ブルーベリー」という婦人会が，それぞれ特徴のある特産物をつくっている．それらの特産物は，「星のふるさと公園」内の物産販売所「清流」で販売されており，注文があれば宅配も行う．
17）世界子ども愛樹祭コンクール実行委員会（1997）：『第６回世界子ども愛樹祭コンクール作品集』矢部村教育委員会，33p.
18）矢部村教育委員会（1997）：『平成９年度　矢部村教育施策要綱』矢部村教育委員会，72p.